

【小説部門・奨励賞】

百足

東京都立豊多摩高等学校 第1学年 浪花 小楨

「フコみたいじゃない？ 学校って」

雑談の中で突然、足守百が問いかけてきた。自分の前席を借りて座って対面しているため、自分の動揺が足守百の瞳に映り込んでいる。質問の異質さのせいか、さっきまであんなに騒がしかった教室の雑音とセミの大合唱が、水中にいるみたいに遠くにぼやけて聞こえる。フコ、という言葉に馴染みが無いので、脳内データベースに検索をかける。格好つけたがデータは言う程になく、もちろん見つからない。こっそりと辞書に手を伸ばそうとすると、自分の困惑が伝わったのか、足守百は言葉を続けた。

「巫女の巫に、三つの虫が皿の上に乗って巫蠱と書くの。それか蠱毒、と言ったらわかる？ こっちの呼び方のほうが有名ね。古代中国で呪いに使われていた術のことを指して、蛇、かえる、とかげなどの爬虫類と、蛆、シラミといった昆虫、それに蜘蛛やムカデと言った節足動物。それを壺に入れて互いを喰らい合わせて、最後に生き残った一匹を……」

想い人のことを惚気るように足守百は早口でまくしたてる。その様子を眺めながら、儒教についてやけに詳しく調べていたのはこれかと腑に落ちた。足守百はよく何かに固執する上、相当な移ろ気なのだ。調べきって興味が移るのか、時期によって対象がころころと変わる。たしか先月はヨーロッパのどこかの城だった。先々月を思い返していると、足守百は『巫蠱』とやらの説明を終えたようだった。一気に話したからか息が荒く、深呼吸を挟んでいる。

「ほら、学校には性質の違う人が教室に詰められているから、水族館や動物園によく喩えられるでしょ？ けれど、私は巫蠱が一番近いと思うの」

「互いに喰らい合わせて、呪いをかけるために最後の1匹を育成する。それが、この学び場だと言いたいのか？」

自分の不機嫌さがわかりやすく声色に滲んでいて、少し焦る。蠱毒も知らなかったし興味も薄かったから、説明はほぼ聞き流していたが、要するに失礼な話だ。この学園に苦勞して足を踏み入れた自分のことを、首席合格の噂がある足守百には想像出来ないのだろうか。

「怒らないで頂戴。学園を馬鹿にしたわけじゃないの。ただ、動物園や水族館よりは近いなあ、と思っただけ。それに、巫蠱が薬に使われたという文献もあるのよ？ 優秀な人は、毒になるか薬になるかわからないでしょう？ 新しい毒を生み出した科学者がいるように」

足守百は、薬になる方の優秀な人という印象だ。成績優秀で、言葉遣いは誰よりも丁寧だ。お嬢様のような上品な話し方は足守百だからこそ違和感がない。自分は所謂、毒にも

薬にもならない学生の一人で、陰鬱な性格だ。友人と呼べる人間はほぼいない。足守百の物腰は言葉の通り柔らかく、誰に対しても親切で優しい。だから人望も厚く、多くの人と仲が良い。そんな足守百が自分に話しかけてくるのは誇らしかった。優越感は、居心地の良い風呂釜につかるようなものだった。足守百と誰よりも親しく理解もできている実感は、それに入浴剤がしゅわしゅわと沈んでいく様子そのもので気分が良い。しかし今、足守百がなぜこんなことを言い始めたのか一切わからない。『巫蠱』の話聞く限り肝が冷えるような心地がする。おぞましい話なのに、なぜあんな恋焦がれるような表情で話せるのか。誰よりも理解していたはずの足守百が問いを出した。

「それとも、あなたは水族館や動物園の方がこのクラスにあっていと思うのかしら？もしそうなら、私なんの生物か教えてくれない？ あ、もう授業が始まるわね。じゃあ、また。次の休み時間に答えてもらえると嬉しいわ」

考えたこともなかったのも、自らの席に戻る足守百の背を見つめて、思いを巡らせる。が、キンコン、と音が鳴って中断となる。級友たちが一斉に席に戻って先ほどよりも落ち着いた空気になり、程なくして先生が入ってくる。生物の授業だ。教科書とノートを机に出して、勘案を再開する。偶然か否か、教科書の巻末資料には、多様な生物の名前と写真、特徴が載っていた。足守百はそういう人間だから、必然かもしれない。次の授業が生物であることと、生物の教科書に資料があることを前提として、休み時間に話を振る。ちょうどチャイムが鳴る前にこの質問をぶつけるように語ったのだろう。まんまと手中で転がされているのだ。よくあることだが、毎回気がつくたびに悔しい。予想を外れようと言動を意識してはいるが、無意味に等しいだろうことも、悔しきの糧になってしまう。今回も敗北を認め、生物一覧に目を向ける。賢さと、仲間意識を持ち合わせている生物が足守百に近しいと思う。海の生き物なら、イカはどうだろう。頭がいいというイメージがあるが、あまり当てはまらない。軟体生物だからだろうか。それとも見た目だろうか。足守百はいつもどこか飄々としていて、ミステリアスといえば聞こえはいいが不思議な印象を抱かせる、実際も不思議としか言い様のない動きをする人物であるから、案外難しい。

そうだ、初めの質問も考えなくてはならない。学校は水族館ではなく、水槽という表現なら小説か何かで見かけた。魚たちを海中ではなく、水槽に閉じ込めることで、その狭い世界が全てだと勘違いするらしい。人間もそうだ。本当の世界の広大さも知らず、移動せずに水槽のままで一生を終える人の方が多いだろう。自分もその中の一匹だ。水族館も動物園も、言われてみれば納得ができる。特に、水族館の巨大水槽に、魚たちが群れを造って過ごしている様子と、この教室はそっくりだと感じる。悠々自適に過ごしているように見えて、どこか息苦しい。自分の居場所はここではないと感じる若人が多い理由が理解できるくらい、この水槽は狭すぎるのだ。動物園は、それぞれの動物が檻の中に入っていて人間に見られるように展示されているからか、イメージが上手く湧かなかった。陸の動物のほうが生態を知っている種類が多いので決めやすいだろうが、異種族でも関わり合える水族館のほうが近いと感じる。水族館の巨大水槽の中で、同じ種でなくても群れていて、

各々で回遊しているように見えるのだ。捕食関係にあるものも無論存在する。スクールカーブにも近い、生態系に組み込まれている。だが、捕食者が腹を減らしていなければ、特に被食者が困るようなことはない。問題は捕食者が腹を減らした時、正確に言い直せば、鬱憤を溜め込んでいる時である。それを弱いものに向けることで、甚ぶる快楽を覚えてしまう。完全に主観だが、誰でも容易に想像できるはずだ。足守百が巫蠱だと言ったのはこういうことだろうか。虫の蠢く様は、その壺に入っているものからすれば恐ろしくてたまらない。そして、蓋を開けた、虫を食い合わせあった張本人は、その蠢動を見ない。他の生物に脅かされることがない捕食者と水槽の外の客からは、青い春とも呼べる水槽が美しく輝いて見えるのだ。この学び場は水族館の巨大水槽のようなものである、と自分の中で結論付いた。海洋生物のページが三枚しかなかったため、決まってしまうえば、案外さっくりと初めの質問の答えも用意できた。足守百への回答は定まったが、授業はかなり進んでいて、物思いに耽っていた時間が耐え難い後悔へと変化してしまった。

やっとチャイムがなった。やっと、の言葉で自分が待ちわびていたことを知り居心地が悪くなる。だが、楽しみにするのは足守百からの言葉をじっくりゆっくりと考えるのは面白いからだ。しかたのないことだと自分を説得する。ストレスではない、少しの負の感情を抱きつつも、共に日常を過ごせているのはこのお陰である。足守百は優秀だから、比べられていなくてもどこかコンプレックスが刺激されてしまう。だが、知識欲ともいべき好奇心すらも刺激されるから、足守百とは……これらの行為に理由付けをしている自分に、足守百が近づいてきた。

「ねえ、答えてくれる？ さっきの時間中、ずっと楽しみにしていたの」

そんなことは、授業が何よりも好きな足守百に限ってない話だ。だが一方で、それを断言しきれない自分もいる。疑えないほどの眩しい笑顔で答えを待ちわびている様子に、後ろめたさを感じて目を逸らした。

「イルカ、に近い気がするよ。そしてこの場所は、水族館の巨大水槽によく似ている」

声から、ずっとではなく授業の空き時間であろうとも、足守百が自分のことを考えていたことを嬉しがっていることに気がつく。舞い上がっているのだ。そう、と呟く足守百を見つめる。顔が赤くなっていないか心配だ。そして声に感情が乗り過ぎてしまうのを治したいと強く願う。恥ずかしい癖表に出れば、必ず目敏い足守百に見つかってしまうだろう。

答えの理由を問われたから、先ほどの考えを簡潔に伝える。足守百は、黙ってそれを聞いていて、少し考え込んでから言った。

「そうね、なるほど。あなたがどんな風はこの学校を見ているかわかった気がするわ。あなたの考えも好きよ、私」

好きよ、の成分に自分への好感度が含まれている気がして、どこかドキドキしてしまった。足守百はそういう意図ではないので、そう感じてしまう自分が浅ましく思える。そんな動悸を知ってか知らずか、足守百はまた口を開く。

「きちんと考えてくれてありがとう。あなたがどう私を見ているか、わかったような気がするわ。イルカはね、海の豚と書くでしょう？ 語源は知らないけれど。彼らは頭がいいから、仲間同士で連携をとって、被食者を痛ぶることがあるの。この前ニュースで見たわ。可愛らしいイメージだけど、かなり狡猾なのよ、イルカって。野生生物である限り、ある程度の残虐性を併せ持たないと生き残れないから仕方ないけれど。まあ、これは人間社会での基準だから、仕方ないなんて言葉で片付けられないわね。言葉選びを間違えてしまったわ、ごめんなさい」

相槌は途中から打てなくなっていた。足守百のトーンがどんどん変わって行って、初めて聞いたような冷たく、鋭い声になった。足守百が話すには理路整然としていない違和感と、勢いに気圧されて、口を挟めなかった。勇気を振り絞って足守百が話すような意図はない、と弁解する。眨めるつもりはなかったのだ。普段とは異なる強い語気に自然と体が強張っていた。わざわざ勇気を出さなければ、発声すら出来なかった。イルカが嫌いな訳ではないだろう、足守百の言いたいことを探る。足守百は安らかな表情を貼り付けたまま、手元を見ていた。先ほどの穏やかな気持ちはどこかに吹き飛んでいったようで、自分のおでこに冷や汗が滲んで前髪が張り付く感触がする。足守百はぐるりと教室を見渡して、にっこりと笑みを浮かべる。

「私はね、ムカデがいいの。私の名前『足守百』の中に、百と足が含まれているでしょう？ それで、百足。草食だからヤスデでは駄目よ？ とにかく、巫蠱の中の百足になりたい。目が見えなくても、感覚でミミズやクモを食らい続けるようになりたい。最後の一匹を食べて、生まれ変わりたいの。それを手伝って欲しい。あなたは私を認めてくれているから、最後の一匹になって欲しいの。もう、こんなお願いはしないから」

突然の独白と懇願に驚き、足守百の目を見て思い出した。足守百と見つめ合うと、いつもぞくりとした。何か心の内側まで見透かされたような気持ちがしたからだ。今思うと、あれは捕食者の双眸だったのだ。自分という被食者へ向けられた視線だったのだ。先程わくわくと期待して、イルカの名をあげた過去の自分を殴りたいような衝動に襲われる。足守百はイルカが嫌いなのではない。百足だっただけだ。今、妖しげに笑っている足守百はどう見ても、百足だ。教室に体を張り巡らせて、被食者たちを待っている。足守百の言葉通り『巫蠱』でいうなら、すべてを喰らい尽くす、大百足である。お願いはひどく魅惑的であった。自分が特別な存在だと認められたのが途方もなく嬉しい。けれども、足守百がなぜそれを口にしたのか。生まれ変わる、とは何か。疑問が拭えずに増え続けているから、返答が上手くできない。それに追い討ちをかけるように、足守百は告げた。

「それと一つ言わなきゃいけないわね。私、さっきの話の中に嘘を混ぜたの。巫蠱は呪いにしか使えなくて、薬には、なり得ない」

汗が止まらないのも熱を持った顔も、夏の暑さのせいではないだろう。響いている教室の喧騒に、百足が這いずる音が加わった。